

## 平成20年度特別講演会

### 優しさの心って何？

日 時：平成20年10月25日（土） 13：30～15：30

場 所：日本赤十字看護大学：ソフィアホール

講演者：萩金谷天満宮宮司 陽 信 孝

「去りてなほ 笑顔残せし 妻なれど  
向きて語るも 言葉（ことのは）返らず」  
「家族（うから）と ゆっくりとした  
お別れと 知れど厳しき アルツハイマー」

六年前、平成14年12月11日、妻はきれいな、穏やかな顔で眠りについた。

その夜、娘が、「お父さん、良かったね。」と言った。「何故」と問い返すと、「お父さんから電話があり何事かと帰ってみるとお母さんはもう息を引き取っていたよね。でも、苦しまず、とても穏やかな顔だったし、お父さん、もうええわーね。」

私が、悩み、苦しみ続けながら介護していたことに対して、私の考え方が間違っていなかったことへの娘の答えだった。12年間、24時間態勢で、介護してきたことへの「父さん良かったね。」の言葉であった。昼食を終え、台所で片付けをしていた20分余りの出来事だった。

妻に出来たことは、死を迎える2ヶ月前までは、歩くこと、噛むこと、飲み込むことだけで他の機能はすべて忘れ去り、ハミングと笑顔と私だけは忘っていなかった。

若年性アルツハイマーという病気への世間、医療機関、介護関係者の知識・認識・理解への不安と、日々機能を失い、過去を少しずつ失っていく妻と少しでも多くの時間をもちたいという思いが、誰にも委ねることの出来なかった理由であった。

私に介護の知識があったわけではない。

韓国の諺に「子どもを育てることを知って嫁に行く女性はいない。」と言われてるように「介護を知って介護に入る者はいない。」これが家族が認知症に出会う最初だと思う。

私の場合、若年性を思い、6年目に亡くなった、

かつての同僚と接してきたこと。父が認知症「痴呆、ボケ」となり、10年ばかり母や妻と共に介護の経験があったことから多少理解できたことが、少しでも妻につらい思いをさせずにすんだと自負している。

痴呆、ボケも同じことは言えると思うが、若年性の場合、「家族とのゆっくりとしたお別れの時間をもらったという考えのもとに介護に入れた。レーガン大統領の「スローグッドバイ」に端を発している。

私なりに書を紐解き、関係の講演等に出向き、病気に対する学習を繰り返した。

専門的知識ではないが、認識、理解するには十分であった。

痴呆、ボケと言われてきたものは、65歳過ぎ、昔、頭を手術したり、強打したことのある人や、年をかさねる中で血液の流れに支障をきたすことが大きな要因と言われている。

若年性は大きく2つのことが理由とされている。急激な精神的ショック。いま一つは、急激な環境の変化といわれている。

ショックから瞬間的に何らかの作用で脳の萎縮が始まり、萎縮し続けていく。言い換えれば、すべての機能と能力を失い、話すこと、書くことを忘れ、噛むことを忘れ、飲み込むことを忘れ、足は丈夫でも歩くことを忘れ赤ちゃんに帰っていくことになる。

当初は過去の事象、人等すべて記憶に留めているが、少しずつ遠くの事象、人の記憶がなくなっていく。最後には過去のすべて、家族すら忘れてしまう。厳しくも悲しい病といえる。一年一年と記憶を失っていく妻を、娘達にとっては母の姿を見ながら生きている日々には胸のえぐられる思いで過ごすことになる。

思い出の地を少しでも訪れるが、美しさ、食べ物への喜びはあるが、帰りはどこへ行ったかは忘れて去っている。むなしい旅を幾度繰り返したのか。次にはその感動すらなくなっていく。

不思議なことに、アルツハイマーにかかった瞬間からのことは何一つおぼえていない。

日々の生活にそうした現象は繰り返されていたが、たとえば、手を引いてトイレに行き、洋式はいっさい受け付けてくれないことから和式を使う。後ろからズボン、ズボン下、紙おむつを下げ、一緒にしゃがみ、両脇から手を通し妻の膝頭を押さえて安定させる。

機嫌の悪いときは中止し、トイレから出て二、三歩廊下を歩いて、「さあ、母さんトイレに行こうね。」と声をかければ、今しゃがんだことは忘れてるので何度でも繰り返す。

根気良く繰り返すことで、紙おむつを汚さずにすみ、本人を気持ちよく過ごさせてやれる。

紙おむつを当てたから介護ではなく、紙おむつを汚さないように心がけてやるのが本当の介護の心ではないだろうか。

脳が萎縮するという事は、丈夫な体以外のすべての機能、言葉、会話を失い赤ちゃんに帰っていくことを認識し、理解して日々接することが何よりも大切な介護の原点であろう。

人間はこの世に生を受け、這い、歩き、学びながら大人の知能に成長していく。しかし、若年性は逆をたどる。だから、学習は全くきかないというより、学習といわれるすべての行為をさせてはいけないということである。

「優しさが ババの薬と 幼な孫

笑顔そそぎて 手を引き歩む」

今、高校二年の孫が4歳のとき、湯船で膝に座って、「ジジあだね、ババ変よ。」と言った。言動に異常な面が見え始めた頃であった。

「ババね、サンダルで廊下を歩いたり、お布団の中に私たちの人形や靴をかくしたり、怒ったり、泣いたり、急に笑ったりするんよ。」

「マーちゃん、ババは病気なの。」「うそつ、お薬も飲まないし、お医者さんにも行ってないよ。」「ババはね、赤ちゃんになる病気なの。マーちゃん4歳でしょう。ババはね、今一歳くらいなの。だからマーちゃんの方がお姉さんなんだよ。ババのお薬は一つしかないんだよ。」「どんなお薬?」「マーちゃんやお兄ちゃん、のぶくんたちお家のみんながバ

バにあげてるでしょう。」「ううん、マーちゃんお薬あげてないよ。」「ババのお手々をつないだり、お歌を聞かせたり、ミカンをお口に持っていったり、お布団を敷いてババをおねんねさせてあげたり、みんなで優しくしてあげることがお薬なんだよ。マーちゃんやお家の人の心の中にあるやさしさという薬なんだよ。」

どの程度理解できたかはわからないが、孫は両親をはじめまわりのみんなに、「マーちゃんの心の中の薬でババは元気になるのよ。」と。

リハビリ、医療、学習、施設での集団生活等、若年性にはかえってマイナスの要素となる。患者を追い込むだけで、かえって苦痛を与え、感情を逆撫でして病をより進行させてしまう。

過去、病気に対する知識、認識、理解のないままに介護が行われ、介護で追い込み、拘束を繰り返してきた事実を反省し、見直してほしいと思う。

「手を取りて 妻さらけおる 己が身を

鬼畜なるかと 葛藤の日々」

講演、旅、買い物、宴会、カラオケ等、どこへ行くにも妻の手を引いて出かけた。どこへ出かけても決して手は離せない。手を離したら最後、あてどなく歩き続ける。

始めの頃は家に帰ると歩き続け、病状が進行してからは、「お父さん、お父さん」と私を探して歩き続ける。

市内であれば、オープンに生きてきたおかげで連絡がいただける。時には、サンダルを貸して下さって、手をつないで一緒に童謡を歌いながら家まで送って下さる。

「家族とのゆっくりしたお別れ」という言葉がグサリと胸に突き刺さり、それなら一分一秒でも共に生きようと心の決めた。私自身も一緒にいたかったし、若年性という病気を、その介護について少しでも多くの人にわかって欲しかった。

当時、理屈はどうでも良かった。妻の為に、家族の為に、自分自身の為に、人がどう言おうが、批判されようが、共に生きる為に決断しなくてはならなかった。そうしなければ、全てに追い込まれて、家族が破滅に道をたどってしまうからだった。

結果は後からついてきた。

そのことが、妻や家族の為に良かったか悪かったかは、私の中では結論は出ていない。

今ひとつ、妻に告知すべきだったのか、せざるべきだったかは私への永遠の課題である。私の判断で

妻には最後まで知らせなかった。更に、妻を送って六年、年を追うごとに私への葛藤は続いている。それは何もしてやれなかったという思いである。喉が乾いた時、空腹の時、トイレに行きたい時、本当に行きたい所等、一度だって妻の思いを叶えてやれたらどうか。いや、一度も叶えてやれなかった。

一つ一つ思い起こす度にすべてが押しつけの介護であったと。

介護の奥深さ、厳しさ、難しさ、それに伴う「心」の問題を絡ませて考える時、幼児に帰っていく若年性という病気を考えた時、どうすることもできなかった部分もあっただろうが胸は痛み続ける。

獣以下の人間が日々報道される日本列島に、高齢化社会は進む中で、介護という「思いやる心」がますます必要となってくる。そうした社会なのに心は暗くなる今日である。

福祉や病院関係の講演に出かけた時、投げかける言葉は、「もし、皆さんや家族が病気や認知症で入院となった折、今、皆さんが勤めておられる施設にあづけたい、入りたいと思いますか。」と。

もちろん個人的にそれぞれの理由はあるとしても、一般論として質問させてもらう。

今も心痛むことであるが、妻に紙おむつを使用することがどうしても出来なかった。しかし、ある時期、やむを得ず使用すると、何の抵抗もなく身につけたとき、涙が止まらなかった。今でも悔やまれるのは、夏だけでも紙おむつを外してやる配慮をしてやれなかったのかと。

介護って大変ですと良く言われるが、食事をさせ、風呂に入れ、寝かせるだけでなく、日々呆けた姿を目の当たりにする度に胸のえぐられる思い。便を口にする。そうした姿に昼夜関係なく接する。そんなことまでわかって介護って大変ですとといえる社会の構築を望む。

「孫たちは 笑顔がババの 葉だと  
 日々にピエロを 演じ続けり」  
 「幾度も われの帰りを たたづみて」  
 待つ妻の背に 雪は積もれり」

お宮の社務所に妻と二人で生活していたが、娘の強い要請から、国道を挟んだ本宅に、祖母、家孫三人の合計八人の生活が始まった。

その夜からは両親は三人の孫（当時2歳、4歳、6歳）を私たち夫婦の部屋に寝起きさせてくれた。妻はその意味もわからず、ひたすら喜んでいて。孫たちは自分たちのものをとりあげられようが、壊さ

れようが悪い顔をせず、見ていて痛々しいほど妻と共に日々を過ごしてくれた。どうすればパパが喜ぶか、嫌な思いをしないかと常にピエロを演じてくれた。

同居前、私自身、萩市の教育長という激務の中で、帰りも遅く、家族には大変な思いをさせていた。ある大雪の夜、十二時過ぎ、仕事が長引き帰宅すると、お宮に橋の上に雪だるまになって、「お父さん、お父さん」と泣きながら私に帰りを待ち続けていた。妻を抱きしめ、教育長を退く決意をし、娘たちと同居する決意をした。

私の遅いときは六歳の男の子の孫が妻を風呂に入れてくれていた。幼い孫たちが力を合わせて妻に接してくれる。そこには、子ども達をそのように仕向け、教育してくれている親たちの陰の姿を見た。

妻の脳の萎縮により、最初に膀胱に指令が行かなくなり、膀胱が伸びきって、残尿処理ができなくなり、オーバーフローの状態、廊下は水浸しの日々が続いた。新聞紙を敷き、妻をきれいにした後、新聞紙をめくりながら廊下をきれいにする。しかし、妻にとっては、自分のことではなく、私の作業の間、のんびりハミングしながら歩き回っている。

私が買い物などに出かけている折、廊下を汚した時は、小学生の孫娘が新聞紙を敷き、風呂のスイッチを入れ、ミカンを食べさせながら、一緒に童謡を歌いながら私の帰りを待っていてくれた。我が家では、当たり前の風景となっていた。

人を思いやる心は一朝一夕に出来上がるものではない。感性は人間死ぬまで磨き続けるものだろうが、その基は家庭教育にあると考える。「介護」の必要性が叫ばれるようになって数年が過ぎたが、現実の中での介護、高齢化に向けての将来の介護と二面から捉えた心の教育、介護への教育が早急に望まれる。

「日々夜々に ゴメンゴメンと 繰り返す  
 ジジは我が家で ゴメンじいちゃん」  
 「雨 風も 鳥の鳴く声 空の雲  
 花鳥風月 すべてが薬」

我が家では「ゴメンじいちゃん」と孫たちから呼ばれていた。しゃがんでズボンを脱がす時、頭を叩かれ、髪を引っ張られても、廊下を水浸しにされても、「ゴメンゴメン」を繰り返す。どれも私や、家族の気配りが足りない為に起こることで妻が悪い訳ではない。わかっていたらそうしたことが起こるはずがない。

日々自分に「あ・さ・し・お」と言い聞かせてい

た。「あせらず、さわがず、しからずおこらず」正直、毎日逃げ出したかったし、腹が立たない日はなかった。それが人間として当たり前の感情を思う。一つ逃げたらすべて逃げてしまうという自分の弱さがわかってきたから。お陰で、「生きることは逃げないこと」ということを学ばせてもらった。

散歩の折、四穴の小さなハーモニカが12年間妻の笑顔を誘いだしてくれた。優雅なピアノのメロディではなく、上手な踊りではなく、相手を思いやる心がたとえ音程が狂おうとも、心を和ませる薬となる。

自然のすべて、動物の鳴き声一つが、患者に薬になることを見つめ直すことが大切なように思う。

人間、怒りには限界があっても、優しさには限界がなく、全身から優しさは泉の如く湧き出てくるものだと学んだ。

笑顔は人間だけに与えられた最高の財産であり、

手を強く、優しく握る、頭をそっと撫でる、そっと肩に手を添える、歩調を合わせて歩く等、全身で優しさは注げるものである。

看護、介護に必要な「心」とは、相手の立場に立った言動、人の心の痛みのわかってあげられる感性、共感、寛容、愛といったごく当たり前の日本の文化だと思う。延々と引き継がれてきた日本の生活文化であろうと思う。

現在の国の施策の中で、現場は混乱するばかりだし、机上の空論の押し付けばかりでは現場もたまったものではない。

「心」を持って日々看護、介護にと思いは強くとも現実には厳しいことも理解できるが、現実には現実としてせめて「心」の看護、介護の理解を深めつつ頑張してほしいと切に願う一人である。